

「言語文化交流演習」
-留学生の言語的・文化的背景を生かした言語教育の取り組み-

西住 奏子

“Language and Culture Exchange”
- International students’ awareness through teaching their own language and culture -

Kanako Nishizumi

要旨

本稿は、短期留学生プログラム Japan Program at Chiba (J-PAC)の学生が、千葉大学言語教育センターで開講される外国語科目に母語話者・準母語話者として参加し、その言語の学習者とともに活動する普遍教育科目「言語文化交流演習」について論じたものである。留学生が、自分自身の言語・文化を学ぶ日本人学生との協働学習において、言語・文化に対する興味や理解を深めるとともに、千葉大学においてどのように教えられているのかを知り、自身の持つ言語的・文化的背景を言語教育のリソースとして積極的に活用することが本科目の目的である。本稿では主に、留学生に課せられる「実習報告書」及び「中間報告会」「反省会」における取り組みを分析し、筆者の科目コーディネーターとしての役割、学生との接し方について述べながら、留学生が、発音や文法等、自分の言語について興味や疑問を持つだけでなく、協働学習を通して日本人学生との接し方について気づきを得ていく姿に注目する。

Abstract

This paper focused on a general education course called “Language and Culture Exchange” in which exchange students belonging to Japan Program at Chiba (J-PAC) participated in foreign language courses offered by Center for Language Education and helped language learners. Purposes of the course were to deepen their understanding of their own language and culture, to know how they were taught at Chiba University, and to make good use of their language and cultural backgrounds as a resource of language education. By analyzing ‘activity reports’ written by course participants as well as their activities in ‘mid-course meeting’ and ‘final review meeting’, this paper discussed how I, as a course coordinator, encouraged them to work in class and pointed out that they got awareness of not only grammatical characteristics of their language but also how they could help and communicate with language learners, i.e. Japanese students, through interaction in activities.

1. はじめに

日本語を学びたい、日本文化を体験したい、専門知識を日本の大学で深めたい等、様々な目的を持って留学する学生たちだが、それと同時に、日本人学生と積極的に交流し、自分の言語を教えたり、文化を紹介したりしたいという気持ちを強く持って来日する学生も多い。これは、筆者が千葉大学において担当する短期留学生プログラム J-PAC (Japan Program at Chiba) に参加する学生と接する中で毎年実感することである。そのようなニーズに応えるとともに、学生の持つ多様な言語的・文化的背景を言語教育のリソースとして積極的に活用することを目的として、千葉大学では普遍教育科目「言語文化交流演習」を開講している。

これまで日本語教育や留学生教育の分野において、大学機関の日本語科目に日本語母語話者がボランティアや TA として参加するケース (Azuma 2008, 本田 2013) や、地域の日本語教室に日本語母語話者が (小島 2014)、あるいは日本語非母語話者が (金井 2010) 参加して学習者と交流するケースを分析し、ボランティア、TA との交流が日本語学習者に与える学習効果やボランティア活動参加の動機付け等が研究されてきたが、「言語文化交流演習」のように、留学生が日本の大学機関において言語教育のリソースとなり、母語話者あるいは準母語話者として外国語科目に参加し、日本人学生と協働で学習する科目を扱った研究は、管見の限りなされていないように思われる。本稿では、「言語文化交流演習」における取り組みを紹介するとともに、留学生が自身の言語を学ぶ日本人学生との協働学習を通して何を学び、どのような気づきを得ているか、また教員の声かけがどのような気づきを促しているか論じたい。

2. 「言語文化交流演習」の概要

「言語文化交流演習」は、2010 年に始まった前期開講科目で、千葉大学言語教育センターで開講される外国語科目に留学生が母語話者・準母語話者として参加し、その言語の学習者とともに活動する科目である。筆者の担当する短期留学生プログラム J-PAC に参加する学部交換留学生及び日本語・日本文化研修留学生 (以下 J-PAC 生とする) のみの履修を認めており、これまでの受講者数は以下の表 1 に示すとおりである。受講者の日本語能力は問わず、初級から上級までいずれのレベルでも履修することが可能である。

表 1：年度ごとの「言語文化交流演習」受講生受入外国語科目とその受講者数

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
中国語	6	4	3	2	7	8	6
英語	3	2	6	3	7	1	4
ドイツ語	0	1	6	6	5	2	6
朝鮮語	3	0	0	0	1	0	0
フランス語	0	0	0	0	1	0	0
受講者数合計	12	7	15	11	21	11	16

J-PAC 生が、1) 日本人学生言語学習者との協働学習の場、交流の機会を持つことで、2) 自分自身の言語・文化に対しての興味や理解を深めること、また 3) 言語・文化がどのように教えられているのかを知り、4) 自身の持つ言語的・文化的背景を言語教育のリソースとして積極的に活用することを、本科目の目的としている。

履修者の母語・母国語によって参加する授業が異なるため、筆者はまず科目のコーディネーターとして以下の手順で外国語科目担当教員と連携して開講前の準備を行う。

【開講前】

- ①11 月頃に、言語教育センターにて外国語科目を担当する教員に、担当科目における「言語文化交流演習」履修者の受け入れ可否について問い合わせる。教員によって差はあるが、例年、1～3 名ずつ J-PAC 生を受け入れていただいている。
- ②J-PAC 生に対し履修希望調査を行う。その際、開講の可能性のある言語について知らせる。
- ③調査結果を受けて、およその受講希望者数を外国語科目担当教員に知らせる。
- ④履修を希望する J-PAC 生が自身の言語の科目を担当する教員に連絡を取り、12 月あるいは 1 月中に授業見学 1 回と面談を行うように、また、面談時に外国語科目における自身の役割と参加する可能性のある授業の曜日と時限を確認するよう指示する。
- ⑤外国語科目担当教員に、面談の結果を踏まえた受け入れの可否を再度確認する。

そして、学期が始まってからの授業の流れは以下の通りである。

【学期開始後】

- ⑥4 月初めに全体説明会を実施し、外国語科目担当教員及び履修生全員が参加する。コーディネーターが科目の目的・内容・評価等について説明し、その後言語別に分かれて担当教員と履修生らで打ち合わせを行い、履修生が参加する外国語科目の開講曜日、時限、語学レベル等を確認する。ここで履修生は、他の受講科目と日程が重ならないよう注意する必要がある。
- ⑦履修生は学期中、少なくとも 7 回の言語教育センターの授業に参加し「実習」を行う。毎回担当教員と実習内容について事前に打ち合わせを行い、実習終了後には担当教員とコーディネーターに実習内容と振り返りを記録する「実習報告書」を提出する。
- ⑧履修生全員が参加する全体会、具体的には 6 月初めに「中間報告会」を、7 月下旬に「反省会」を実施する。中間報告会では、それぞれが参加する外国語の授業における実習内容を報告し、反省点についてはアドバイスし合い、よかった点については共有し後半の実習に生かすことを目的とする。反省会では、実習全体の振り返りとして個々人が学んだこと、考えたこと等を発表し、その内容を踏まえて「期末実習レポート」にまとめ担当教員とコーディネーターに提出することになっている。

また、評価は次の通りである。

- ・実習及び実習準備 60%：外国語科目担当教員が 100 点満点で評価
- ・実習報告書 20%：コーディネーターが評価
- ・中間報告会・反省会での発表及び期末実習レポート 20%：コーディネーターが評価

最終評価は外国語科目担当教員と相談した上で、コーディネーターがつける。

以上のような流れで構成される本科目であるが、コーディネーターは実際に外国語科目に出席しないことから、「実習報告書」を介してのやりとりや全体会を通して、履修生の実習内容及び実習に取り組む姿勢を把握することになる。次の章で、筆者のコーディネーターとしての役割と、本科目を通して得ていると見られる履修生の気づきについて論じたい。

3. 「言語文化交流演習」履修生の気づきとコーディネーターの役割

本科目の受講理由について問うと、以前は「自分の言語や文化が千葉大学でどのように教えられているのか興味がある」、あるいは「日本に留学し自分自身の日本語能力も上がった。今度は自分の言語、文化を学ぶ千葉大生の手助けがしたい」という留学生が多かったように思うが、最近は「将来、日本で英語を教えたい」、「日本で日英通訳者になりたい」、あるいは「国でドイツ語を教えることに興味がある」というような、将来の職業と結びつく経験を期待して受講を希望する学生も増えてきたように感じる。前章でも述べたように、筆者は短期留学生プログラム J-PAC の担当であると同時に、語用論を専門とし、留学生を対象とした日本語教師でもあるため、コーディネーターとして学生の専門分野や日本語能力を考慮し、学習者との接し方や、言語の特徴、言語教育に関する気づきが得られるようなフィードバックを心がけている。本章では、コーディネーターが中心になって指導する「実習報告書」と「中間報告会」「反省会」といった全体会の位置付け、そこで得られる学生の気づきとコーディネーターの役割についてまとめる。

まず、毎回の実習後に提出される「実習報告書」には、以下の 5 項目を書くよう指示している。

1. 実習日
2. クラスサイズ（授業参加学生数とその授業に参加した J-PAC 生数）
3. クラスでの役割について
 - ①自分の役割
 - ②自分の役割に関する反省点
4. 気づいたこと
 - ①授業参加学生の中国語／英語／ドイツ語／朝鮮語／フランス語学習について気づいたこと、特に学習者にとって難しそうな点

②自分の言語、文化、言語教育について考えたこと

5. その他、気づいたことを自由に記述

筆者が、この報告書を通して知る履修生の「実習」内容は、言語、外国語科目担当教員、参加する授業の語学レベル、クラスサイズによって多種多様である。例えば、ある少人数の英語上級クラスでは、J-PAC 生が中心になってディスカッションのテーマを決めたり、ディスカッション・パートナーとなって議論を深めたりといった役割を果たし、中国語中級クラスでは、日本人学生の中国語の発音を直したり、日本人と中国人がそれぞれの学習言語で書いた文章を読み合って、間違いを指摘したり、日本と中国の歌を教え合ったりしているようである。学習者の多いドイツ語初級クラスでは、J-PAC 生が易しいドイツ語を交えながら日本語でドイツのある町や習慣をクイズ形式で紹介したり、学生がドイツ語の問題を解く教室を歩いて回り、質問を受け付けたりしている。どの学生も初めての“教師”経験に戸惑いながらも、外国語科目担当教員指導のもと試行錯誤を重ね、熱心に取り組んでいる様子がわかる。

コーディネーターの役割のひとつに、「履修生の緊張感を取り除くこと」があると考え。学習者の前では見せられない不安、外国語担当教員にどう質問してよいかわからず、放置してしまっている疑問に気づき、的確にアドバイスすることで、履修生はまた次の実習にチャレンジしていけるのではないかと考え、そのような姿勢で「実習報告書」に目を通すようにしている。

次に、「中間報告会」では、異なる外国語科目に参加している J-PAC 生と 4～5 人のグループに分かれて話し合い、実習内容と実習で困っていることについて情報共有した上で、以下の項目についてアンケートに答えてもらっている。

1. 自分の役割として実習でどのようなことをしたか
2. 実習で困っていることは何か
3. 困っていることについて、どのようなアドバイスをもらったか
4. 中間報告会を通して考えたこと
5. 次の実習から気をつけたいこと、やってみたいこと

このアンケートの集計結果は、外国語担当教員にも伝えている。

コーディネーターとして、「中間報告会」は、履修生同士が互いの実習内容を知りヒントを得る場、実習中に困っていることを打ち明け、解決方法を共に考える場と捉えている。また年によっては、実際に実習で行った国を紹介するプレゼンテーションや言葉のゲーム等を互いに実演しようという声が学生から出ることもある。この会での取り組みが、中間報告会後の実習に大きく影響すると感じている。

そして、最後の「反省会」では、中間報告会後の取り組みを中心に実習全体を振り返っ

て全員が短いプレゼンテーションをし、他の学生から得たコメントを踏まえて「期末実習レポート」を作成させている。その際、これまでの「実習報告書」すべてに必ず目を通し、実習でやってきたことや得た気づきの変化に注目してみるよう指示している。

ここでこれらの「振り返り」を中心とした活動で、履修生がどのようなことを「困っていること」として挙げるのか、そしてその気持ちが科目での取り組みを経てどのように変化していくのかについて触れる。先にも述べたように、「実習」は、履修生にとって初めての“教師”経験となることから、例えば学習者の発音や文法の間違いに気づいても、どのように直してあげたらよいかわからないという点がまず一つ挙げられると思うが、本章では言語学習者としての日本人学生との接し方に注目し、毎年挙げられる主なものとして以下の3点を取り上げたい。

1. 日本人学生は恥ずかしがって、質問したり、こちらの質問に答えたりしてくれない
2. 日本人学生は話しかけてくれない
3. 日本人学生が発音や文法を間違えた時、すぐに直してよいのか、後で直してあげたほうがよいのかタイミングがよくわからない

最初の2点はこの科目に限らず、日本人学生と接して一番初めに留学生が持つ印象のひとつであると言っても過言ではないかもしれない。この点について筆者は、「実習報告書」を通して、1) 日本人学生は本当に恥ずかしがっているのだろうか、2) もしそうならば、その原因はなんだろうか、3) あなた自身は日本人学生に積極的に話しかけているだろうか、という問いかけをするようにしている。すると、「中間報告会」で実施するアンケートの「3. 困っていることについて、どのようなアドバイスをもらったか」のところで、

- ・自分が質問をしたら、相手が答えるまで少し待つてあげたらいいのではないか
- ・日本人学生から話しかけられるのを待つのではなく、授業の前、後の時間も使って自分から声をかけてみたらいいのではないか
- ・急に母語で話しかけたら相手も緊張するかもしれないから、特に初級のクラスなら、日本語で話しかけてみて、まずはよい雰囲気を作ろう

といったアドバイスをもらったという記述が多く見られる。「実習報告書」を介してのやりとりや、「中間報告会」での話し合いを通して、日本人学生に対する姿勢に変化が生じたのではないかと分析する。

また、3点目については筆者も日本語教師としてアドバイスしつつ、学習者本人に丁度よいタイミングを聞いてみたり、外国語担当の先生に直接相談してみたりするよう促している。履修生の様子を見てみると、実習前に毎回外国語担当の先生と打ち合わせをしているにも関わらず、なかなか疑問や迷いについて相談できなかったり、友だちになっても学

習者に直接聞くまでの勇氣は持てなかつたりする学生もいるようである。実際に、「期末実習レポート」にその後の実習で学習者とペアになるたびに間違いを修正するタイミングについて話し合えるようになり、丁度よいタイミングは人によって違うという気づきを得るとともに、それがきっかけで日本人学生と話せるようになったと振り返る学生が少なくなない点から、コーディネーターからのこのような声かけは必要なのではないかと考える。

以上、本科目を通して得られたと考えられる学生の主な気づきと、それを促すコーディネーターの役割について、「実習報告書」「中間報告会」「反省会」での取り組みを中心に論じた。

4. まとめと今後の課題

留学生が自身の持つ多様な言語的・文化的背景を言語教育のリソースとして積極的に活用して、日本人学生とともに言語や文化、言語教育について学びや気づきを深めることを目的とした「言語文化交流演習」における授業の取り組みを紹介した。本稿では、J-PAC生の立場に立っての见解を中心に論じたが、外国語科目担当教員の協力を得て、J-PAC生が参加した授業の外国語学習者や、本科目を履修し、実際にJETプログラム等に参加し英語のALTや、地域の国際交流員として働いている学生へのアンケート調査も実施し、多角的に「言語文化交流演習」の取り組みを分析していくことを今後の課題としたい。

参考文献

- Azuma, Y. (2008). Do volunteer teaching assistants recruited from native speakers help to increase the effectiveness of language teaching?. *留学生教育: 琉球大学留学生センター紀要*, 5, 35-50.
- 金井淑子(2010) 地域日本語教室における学習者の学び. *多言語多文化-実践と研究*, 3, 150-175.
- 小島佳子(2014) 日本語母語話者が地域日本語教室に参加する意義-日本語ボランティアの活動参加継続につながる動機付け. *神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要*, 3, 101-110.
- 本田明子(2013) 学習者と母語話者のインターアクションによる日本語学習の可能性: 立命館アジア太平洋大学における地域交流授業の実践から (2011 年度萌芽的プロジェクト研究 B6 「異文化相互理解過程研究会」 研究報告: 相互文化交流を通じた学びと設計). *立命館言語文化研究*, 24(3), 131-141.